

空襲と空腹の日々

平間 愛子

中央三丁目

戦争とは、一口に言えば、空襲、空腹、空虚の、現代風に言えば、いわゆる「三K」というようなものだと思います。月日のたつのは早いもので、もう五〇年近くもたつてしまいました。が、未だに悪夢のようなサイレンの音が耳にこびりついているようです。

中でも一番印象深いのは、昭和二〇年五月末の大空襲の焼夷弾が、シューシュー花火のような無気味な音をたてて雨あられの如く降りしきる中を、防空頭巾をかぶり、米を五升位入れた袋を背負い、年寄り（義父）を連れて群衆と共に降りかかる火の粉をたたき落としながら、夢中で逃げたことです。新井薬師の碑のような下にしゃがみ込んで、「此処へおれば大丈夫だ」と動こうともしない年寄りを、「冗談じゃないわ。こんな所にぐずぐずしてたら殺されてしまう」と励ましながら、背中を押し押しどこをどう逃げたかわからず、途中あちこちで火災が起きている中を、「火を消していかないのか非国民！」との罵声を浴びながら夢中に行き着いた所は哲学堂でした。

そこには多数の避難民がいて、後からは炎の滝が襲いかかり、これでは集団焼死になるような勢いでした。傍らのオリエンタルでは、フィルムがバシバシ燃え上がり、何十メートルもの火柱が吹き出ていました。主人は中野駅北口に近いアパートに残り、様子を見るとのこと、防空壕も無い所で大丈夫かなと心配はしていましたが、胸騒ぎがないから、生きているとは思っていました。何しろ今現在此処にいる自分達の生死もわからぬ極限状態では、人の事など心配する心の余裕などありません。「ああ、これで我が人生は一卷の終わりか……」とも思えてきて、空しい心地でした。

暫くいる中に、どうにか炎の勢いも衰えてきたようで、夜も明けてきましたが、眠さも空腹も感じませんでした。昨日の夜七時頃、空襲警報と共に逃げ出して、帰り始めたのは昼過ぎでした。一面に焼け野が原と化した所がくすぶり続けて道もわからぬ中を、かろうじて早稲田通りへ辿り着いた時、あら不思議、向こう側には家々があるではありませんか。

「ああ、この分では我が住むアパートは大丈夫かも……」と僅かな希望を覚えたことでした。敵機は中野駅を目指して攻撃したが、風向きのせいとか、方向がずれたせいとか、新井、上高田方面に焼夷弾が流れてゆき、中野駅周辺はどうやら燃えるのを逃れる事ができたようです。燃えた所の人々は気の毒でしたが、せめてもの不幸中の幸いでもあったわけです。もうとつくにアパートへ帰り着いたらしい人達は、私達のことは、年寄りもいることだし、いつ迄たつても帰らぬし、ひよつとしたらもう駄目かも知れぬと思っていたらしく、午後二時過ぎに重い足を引きずりながら疲れきって顔を出した途端、「あら、死んじゃったかと思つてた」と驚きと安心したらしい気持ちで迎えてくれたようでした。

又或る夜、空襲警報と共にドッスンドッスンとの凄い地響きがして、ヒュッヒュッヒュウとうす気味悪い音で外へ出てみると、すぐ近くに、どでかい爆弾が盛んに落ちている様子。「お恐ろしい」と思わずすくんでしまいました。すぐ身近なドッスンドッスンと、スルスルスルスの、ひっきりなしの無気味さに、今にもわが身がすつとんで粉々に砕け散るような錯覚に陥りました。気が狂いそうでした。何しろ防空壕という避難所が無いから、運を天にまかせるしかありません。

このような恐ろしい夜や昼が続くと、気の小さい私などは本当に空襲ノイローゼになり、「何でも良いから、この空襲さえ早

く無くなつたらどんなに助かるだろう。一刻も早く無くなるように」と、心の底から願ひ続けました。だから終戦になつた時は、「ああ助かった。生きていたんだ」と心から歓声をあげたことでした。

又、食の方も配給が少なく、いつも空腹の日が続き、少量の米に人參を細かく切つたにんじん飯や、近郊へ買い出しに行き、衣類と物々交換してきた貴重なじゃがいもを細かく切り、いもめしにしたりして、主人が取り締まりの厳しい中を満員の列車に乗り、福島方面へ買い出しに行き、ようやく手にした何がしかの米を節約して少しずつ食べつないだりして、糊口をしのいできました。たまにさつまいもが配給になつた時は、義父はうれしくてしょうがないようで、良いご馳走のようでした。

小麦粉が配給になつた時は、慣れぬ手つきで手打ちうどんを作り、野菜もろくに入らない、塩と少量のしょうゆ等で味付けしたつゆでも、良いご馳走でした。又、とうもろこし粉が配給になつた時は、こねて丸めてフライパンで焼いて食べたりもしました。少量の米に配給のフスマを多くまぜて炊き食べた時は、ろくに消化しないで出てきたのはびっくりもしました。大豆粕も多量を少量の米に混ぜて炊き食べたが、すき腹にもあまり美味しくないけれど、そんなぜいたくは言っていられません。何しろ口に入るものなら何でも良いのです。餓死したくはないからです。中野駅北口広場のヤミ市で、屋台のサツマイモに何

粒かの小豆が入ったお汁粉を立ち食いしたこともありました。

終戦直後の或る日、省線電車（今はE電）に乗るべく中野駅のホームでベンチに腰掛けたら、駅員に「あっ、そこは駄目。進駐軍の席だから」と注意された事もありました。

又、終戦直後の或る日、あわただしい足音がして、アパートのせまい階段をかけ昇ってきて、トントンドアをノックしたので開けてみると、そこには板巻きの真っ白いキャラコ地を左手に抱えた進駐軍の兵士が立っていて、「ヤール、ツウテンエン」と言うので、思わず聞き返した言葉が、「ツウエン?」「ノーノー」と言いながら、行ってしまったのです。のどから手が出る程欲しかった純綿の白く輝いたキャラコ地が、すうっと現れたかと思った途端、アッという間に消えてしまったのです。「ああ、何という不覚」。いまだに思い出します。

